

第 57 回 ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館 応募書

(仮称)

Hiroshi Sugito

Particles and Forces

杉戸洋 粒子とさまざまな力



左 | 杉戸洋《untitled》2014 油彩・キャンバス 19.2×27.5cm

右 | α 線源密着 OPERA フィルム(20ミクロンほどの長さの飛跡が黒々と写っている)

アーティスト | 杉戸洋

キュレーター | 保坂健二郎(東京国立近代美術館主任研究員)

学術協力 |

飯嶋徹(名古屋大学教授、同大学素粒子宇宙起源研究機構現象解析研究センター センター長)

中 竜大(名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構 特任助教)

阿部智宏(名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構 特任助教)

連携協力 | 米村香(名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構 機構長秘書)

記録映像制作 | 山城大督(美術家、映像ディレクター、ドキュメント・コーディネーター)



展覧会の基本コンセプト

この世界＝宇宙は美しさに貫かれているはずだという信念を抱き、目に見えないものを見えるようにすることに務める点で、アーティストと素粒子物理学者は共通している。その両者が協力しあって、今私たちにとって大事な世界に対するまなざしを提案する、それがこの展覧会の基本コンセプトである。具体的には、アーティストの杉戸洋とキュレーターの保坂健二郎が、名古屋大学の素粒子宇宙起源研究機構(以下 KMI)に所属する研究者数名の協力を得る形で、展覧会が準備されることになる。

提案したい「大事なまなざし」とは、「粒子」のような小さなものへのまなざしと、物質と物質の間で働いている「さまざまな力」、とりわけ「弱い力」についてのポジティブな理解である。素粒子物理学では、物質間に働く力には「電磁気力」「弱い力」「強い力」「重力」の四つがあり、宇宙誕生の瞬間にはそれらは一つの力であったと考える。ここでとりわけ興味深いのは「弱い力」で、というのも、それがもし現在より一割多ければ、それだけで太陽の寿命は二割も短くなってしまふという計算があるように、「弱い力」のその弱さゆえに、この世界は今こうやって保たれていると言えるのだ。

私たちは今「7月革命」後の地平に立っている。2012年7月の欧州原子核研究機構によるヒッグス粒子発見の発表は、標準理論が完成したことだけでなく、それを超えた理論＝世界の把握方法に私たちに移行できる可能性を得たことを意味する。標準理論を構成する素粒子の中で最後まで未発見だったヒッグス粒子が見つかったことで、宇宙誕生の瞬間の理解や暗黒物質の発見に向けて力強く前進したわけだ。

科学界の大きな「発見」は、世界にとっての「革命」となる。アーティストによる世界の把握方法や提示方法も当然変わる。ピカソが友人の数学者を通してポワンカレの先端的な思想を知ったことがキュビズム誕生のきっかけになったことはよく知られている(ポワンカレの思想がまたアインシュタインに相対性理論を完成させるきっかけになったことも)。では、「7月革命」以降、アートの世界で起こりつつある変化の何に着目すべきだろうか。

本展はそれを、少なくとも日本でのそれを、杉戸洋による粒子への関心の深まりだと考える。彼はまさに「弱さ」や「弱い力(相互作用)」を作品の基調とし続けてきたアーティストだ。その杉戸が今夏豊田市美術館で開催される個展のタイトルを「Particles and Release」と命名したのは偶然ではない。彼は明らかに「7月革命」の後の地平において絵画で表現すべきことは何かと考えている。彼がその地平に立てるのは、絵画とは、イリュージョンであれど、重力から自由なところで諸物を配置することを許してくれるメディアであることを自覚しているからにほかならない。ちなみに重力の影響を考慮外として理論を構築できるのは素粒子物理学の特徴でもある。

日本館が、西洋のものとして捉えられ続けている絵画というメディアを通して「弱い力」の重要性を提示する。この枠組みだけだと日本文化特殊論の無自覚な発露として受け取られてしまうリスクがある。しかし素粒子物理学の専門家たちの協力を得ることで、リスクを回避しつつより強固な論理を提示することができるはずだ。つまり「弱さ」の重要性は universal であり、杉戸はその「弱さ」の表現を探求しているアーティストであることを示せるはずだ。見えないものの中に働いているさまざまな力をめぐるアートとサイエンス双方による愚直な探求を重ね合わせることで、日本から強力なメッセージを世界に投げかける、それがこの展覧会である。

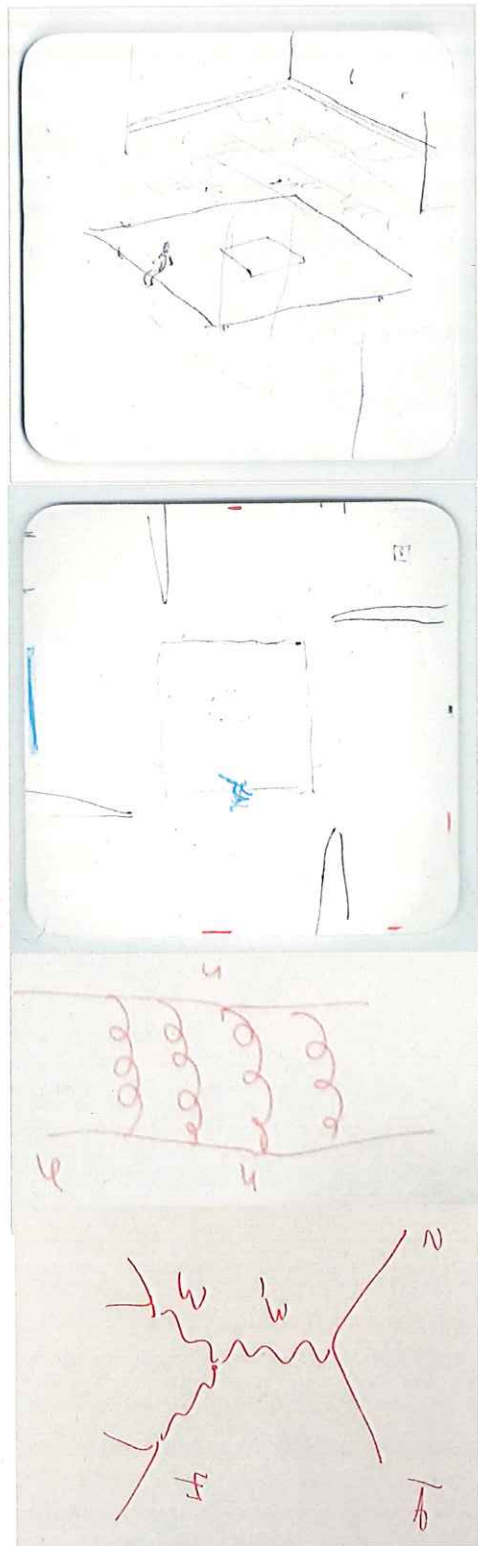
展示の基本構成とその狙い

ギャラリーは杉戸洋による絵画とオブジェを中心に展示する。そこに素粒子物理学関係の様々なモノ、すなわちファインマン・ダイアグラム、実験で使われる機材、観測結果が定着された写真フィルムなどを加える形で、杉戸本人がインスタレーションを構成する。一方のプロティでは、展覧会のプロセスや素粒子物理学の実験のドキュメンタリーを映像で紹介する。ギャラリーとプロティ双方において、その中心部分＝「光の井戸」がある部分にテラスを設置することで、ふたつの空間は自然につながる事となる。

日本館は現在、自然光が差し込むようになっている。絵画にとって理想的なこの環境は、杉戸の作品の色を鮮明に見せる。つまり絵具が粒子であることや、光がその場に存在していることを、訪れた者に感じさせてくれるはずだ。

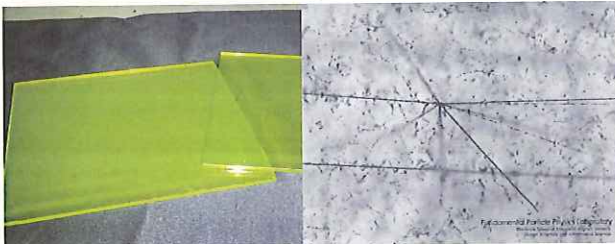
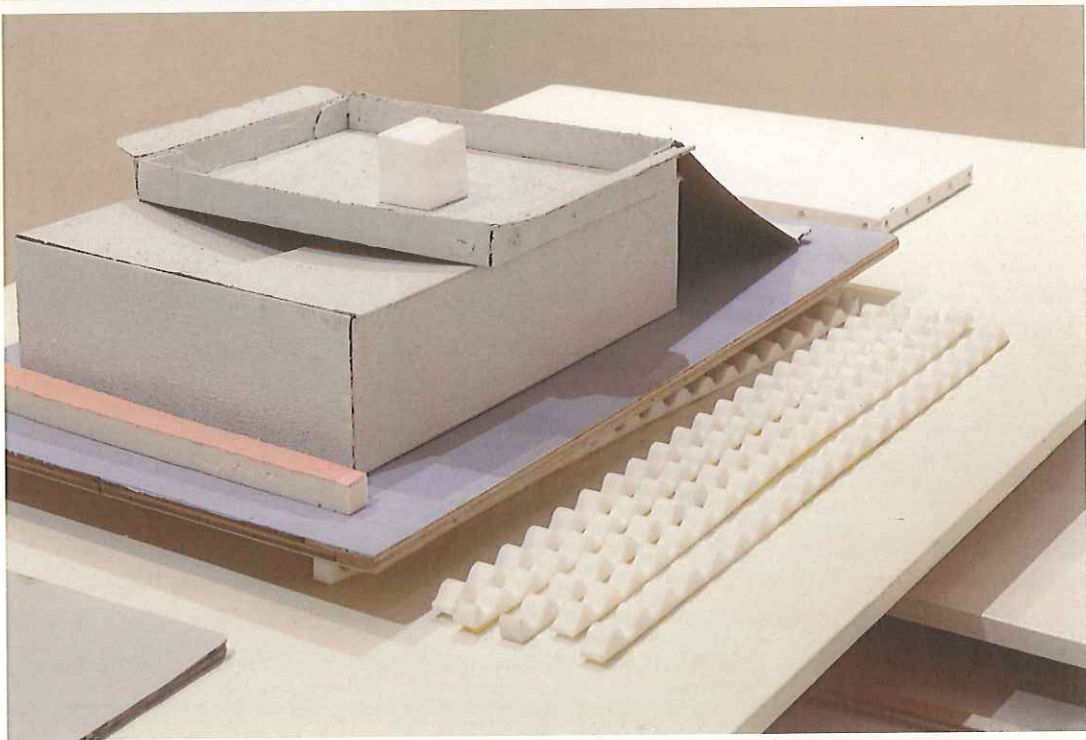
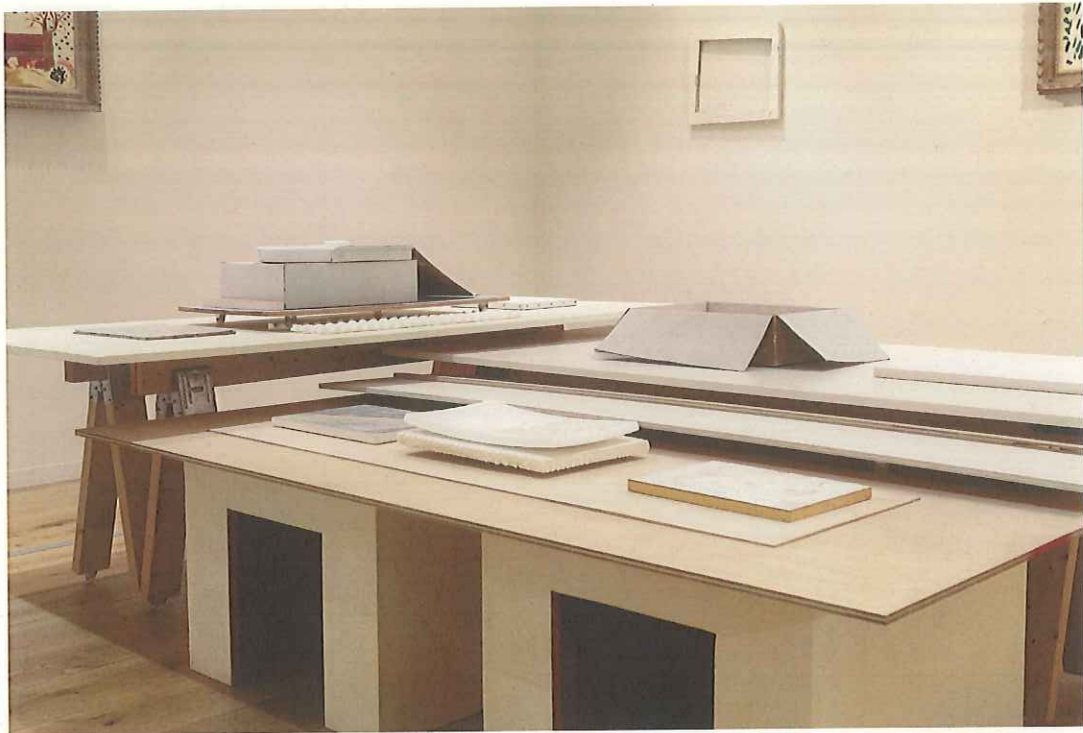
杉戸の作品は新作を中心とする。制作段階で素粒子物理学者との対話が予定されているが、画面内にたとえばダイアグラムを直截に表現することなどは強制しない。あくまでも「粒子」や「さまざまな力」についてのより深い理解が、杉戸の作品世界を深化させることを目的としている。そして今回は、杉戸作品が、素粒子物理学の現場で実際に使われているダイアグラムや機材や材料などと、弱く、ハーモニアスにつながっていきインスタレーションとなることを通して、杉戸の作品世界が十全に表現されることになる。形式と内容の一致が、作品内部だけでなく、インスタレーションにおいても成立するわけである。具体的には、ビュフェ美術館等でのようにいくつかの台が置かれることになるだろう。

素粒子物理学は高度な理論・計算とそれを実証するための地道な実験の協働作業を特徴とする。その計算の場面ではダイアグラムのようなイメージの力が最大限に利用され、実験の現場では生々しいマテリアルが活用されている。イメージと raw なマテリアルとの協働作業というのはアートの特性でもあることは言うまでもない。本展はその事実を、「弱い力」「弱い相互作用」の重要性を感じさせながら来訪者に体感してもらおう空間をつくることを目指す。



上 | 杉戸による本展のためのスケッチ。コースターに描かれている。

下 | 杉戸によるドローイングに見えるが理論物理学者が描いたダイアグラムである。



上 | ビュフェ美術館での杉戸洋展の展示風景。様々なマテリアルがある。
 左 | 結晶の大きさが 20nm のフィルム
 右 | 速度 17 万^{*}./秒で飛んできた炭素の原子核が、乾板中の原子の原子核に衝突して破砕している

出品作家の選定理由

重力を無視できる「空間」の中に物体を配置できるのが、絵画の面白いところだね。絵具は粒子でしょ、色は光による現象。とすれば絵画が表現すべきこと、絵画でなければ表現できないこと、画家として興味のあることって……だね。

杉戸洋

今、時代は、「強さ」のみを求めるのではない生き方が可能かどうかを真剣に考える時期に来ている。テロが頻発し、国家の理念が福祉から競争原理を基本とする経済にとってかわられつつある中でアートが提示すべきは、多様性や差異に対するあたたかいまなざしである。そしてそのあたたかいまなざしを支えるのが、「弱さ」へのシンパシーにほかならない。

ところで日本館では、こしばらく絵画の展示がなされていない。それは映像や写真において注目すべきアーティストが多いことの現れでもあろうが、しかしともすれば、日本には重要なペインターはいないとする暗黙のメッセージともなりかねない。

こう考えて見たとき、杉戸洋こそ、今紹介すべきアーティストであると言えるのではないか。十分なキャリアがあるのはもちろんのこと、彼は「弱さ」の表現を、つまり「弱さ」が受け止められるような作品をつくることを、自らの使命としてきた。しかも、「粒子」への関心を静かに深めていることが示すように、「7月革命」以降の地平に自覚的に立つ彼は、今まさに大きな質的な変化をしつつある。そんな杉戸を、今回ヴェネチアで見せることの意義はいつにも増して大きい。ちなみに日本館には常に外気が入るために絵画には適さないという意見もあるだろうが、杉戸の場合、展示するのに十分な質と量の作品を作家蔵で有しているのだから問題はない。

本展は KMI に所属する研究者たちの協力を得る。名古屋大学では、大学草創期から独創的な素粒子論研究の礎が坂田昌一博士らによって築かれ、「坂田模型」や「小林・益川理論」などの成果が生み出された。これらの理論が私たちの世界にとってどのような意義を持つかは、小林・益川両博士が 2008 年にノーベル物理学賞を受賞したという事実が端的に示しているだろう。また名古屋大学は、「小林・益川理論」を実証した「B ファクトリー実験」(電子とその反粒子である陽電子をほぼ光速まで加速し、衝突させる実験)などの世界的成果を生み出しているのも特徴である。物理学の最先端を知りたいという杉戸の興味を聞いた際に、私が名古屋大学の KMI へのアプローチを思いついた主な理由はここにある。

現段階では、「B ファクトリー実験」をリードする飯嶋徹教授・博士と、暗黒物質の若き研究者である中竜大特任助教・博士、素粒子理論を専門とし第 10 回素粒子メダル奨励賞を共同受賞した阿部智宏特任助教の学術的な協力を得られている(本展が採用された場合、協力者はさらに増えるかもしれない)。素粒子物理学の研究者たちがアーティストとのコラボレーションに親和性が高いことは、東京大学にある同様の機構であるカブリ数物連携宇宙研究機構(Kavli IPMU)がアーティスト・イン・レジデンスとのプログラムを設けていることからわかるし、すでに二度のミーティングを経て、申請者にも実感されている。

これまでも最先端の科学は、アーティストの想像力を刺激してきた。サイ・トゥオンブリーは、アポロが月に着陸した 1969 年に、黒板に数式を書いたような作品をイタリアのボルセナで制作した。トーマス・シュトゥルツはマックス・プランク・プラズマ物理研究所のトカマク型装置を撮影しているし、トーマス・ルフはヨーロッパ南天天文台(EOS)が撮影した記録写真を選んで自らの作品にしている。

だが、それらはどうしても、アートによる一方的な思慕のように見える。言ってみれば本展は、そうした状況からさらに一步踏み出そうとする試みにほかならない。日本におけるアートとサイエンスそれぞれの最先端に身を置く人が対話する機会をつくり、その成果を、ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館という類い希なる場所で提示することにしたのだ。

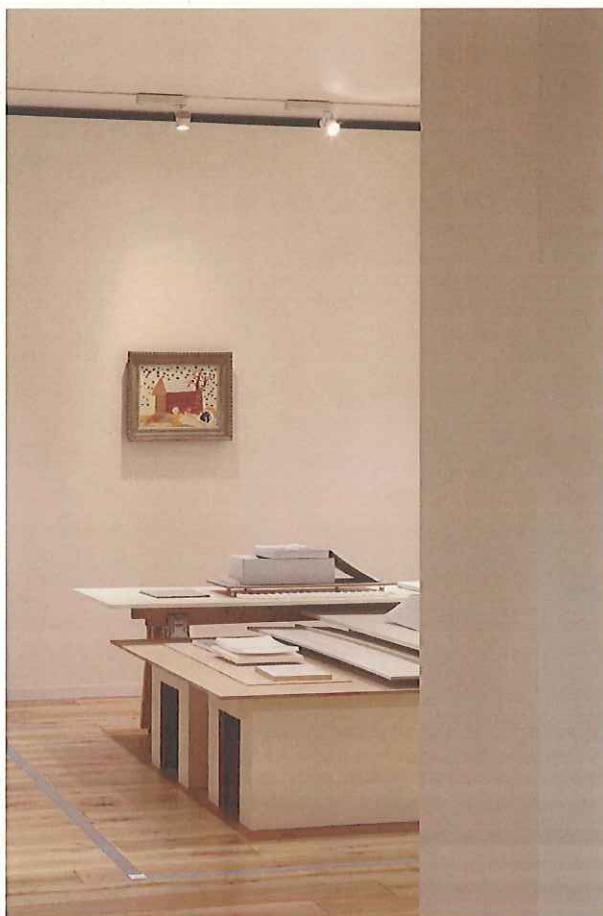
杉戸洋はこれまで、奈良美智、デニス・ホリングワース、小林正人とのコラボレーションを成功させてきた。また、前回のあいちトリエンナーレでは、建築家の青木淳と巨大なインスタレーションを完成させた。そのコラボレーションの力は、きっと科学者との間でも発揮されることだろう。

本展は、アートの領域や展覧会の領域を拡大しようとしているのではない。そうではなくて、パウル・ツェランの有名な言葉を借りるならば、杉戸洋が、「芸術とともにひたすら自分自身に固有のせまさをなかに入り、そして自分自身を解放すること」を期待している。とはいえ、今日のみならずにも複雑な世界においては、固有のせまさの中に入るためには、他者の協力が必要となる。その際、せまさの中で格闘する勇気を持ち続けている素粒子物理学の研究者たちの協力は、とても「強力」なものとなるだろう。

なお、ドキュメントの制作は、名古屋在住の映像ディレクターである山城大督が担当する。つまり本企画は、いわば「チーム名古屋」による実現を目指している。

予算概要(単位 | 万円)

作品制作費(材料費、協力謝金等)	300
関係者旅費	400
作品輸送費(保険込)	600
会場施工費(電気関係含む)	500
現地管理運営費 (コーディネーター謝金、会場運営費)	1300
カタログ作成費(印刷、原稿料、翻訳)	300
広報費	280
通信費	20
その他諸謝金	100
予備費	200
合計	4000



杉戸洋(すぎと・ひろし) 1970 年生まれ 名古屋市在住

略歴 |

1992 愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒業

主な個展(2002 年以降) |

- 2002 「voyager」愛知県美術館
- 2004-05 「Over the Rainbow: Yoshitomo Nara and Hiroshi Sugito」Pinakothek der Modern and K21
- 2006 「Focus」フォートワース現代美術館、フォートワース、アメリカ
- 2011 「paintings and sketches」ジャパン・クリエイティブ・センター(JCC)、シンガポール
- 2013 「Baby, 絵画、それを愛と呼ぶことにしよう 小林正人+杉戸洋」gallery αM *
- 2015 「frame and refrain」ベルナール・ビュフェ美術館、静岡
「天上の下地 prime and foundation」宮城県美術館
- 2016 「こっばとあまつぶ」豊田市美術館

主なグループ展(2001 年以降、国際展および国外の美術館を中心に) |

- 2001 「Painting at the Edge of the World」Walker Art Center, Minneapolis
 - 2003 「Poetic Justice」The 8th International Istanbul biennial
 - 2004 「REAL WORLD - THE DISSOLVING SPACE OF EXPERIENCE」Modern Art Oxford, UK
「The Japanese Experience : Inevitable」Das museum der Moderne Salzburg, Austria
 - 2008 「第 7 回 光州ビエンナーレ」Biennale Hall, Gwangju Museum of Art
 - 2013 「あいちトリエンナーレ 2013」愛知芸術文化センター、名古屋市美術館ほか
 - 2014 「ロジカル・エモーションー 日本現代美術展」ハウス・コントルクティヴ美術館他 *
- *は保坂がキュレーターを務めた展覧会

